

令和 8 年度 第 1 回総合教育会議 会議録

日 時	令和 8 年 5 月 2 8 日（木） 14：30～15：30
場 所	市役所本庁舎 北館 4 階 教育委員会室
出 席 者	高島市長 野村教育長 河盛教育委員 三宅教育委員 森川教育委員 芳村教育委員
司 会	柏原企画部長
事 務 局	企画部 部長 柏原 由紀 企画部市長公室政策推進課 課長 本宮 健男 企画部市長公室政策推進課 係長 池澤 周哉 企画部市長公室政策推進課 課員 藤岡 那緒 こども福祉部 参事（こども家庭担当部長）鳥越 雅也 こども福祉部こども家庭室ほいく課 課長 富永 新也 教育部 部長 萩原 裕子 教育部教育統括室管理課 課長 竹内 浩文 教育部 参事（学校教育担当部長）塩山 利枝 教育部学校教育室 学校教育課 課長 大林 亮 教育部学校教育室 主幹（幼稚園教育担当課長）内藤 純子 教育部学校教育改革推進室 室長 山川 範
会議の公開	会議の冒頭に諮り、出席者 6 人中 6 人の賛成多数により決定した。 〔芦屋市情報公開条例第 19 条の規定により非公開は出席者の 3 分の 2 以上の賛成が必要〕 ＜非公開とした場合の理由＞ 地方教育行政の組織及び運営に関する法律第 1 条の 4 第 6 項の規定に基づき、公益上の必要があるとともに、芦屋市情報公開条例第 19 条第 1 号の規定に基づき、会議の内容が意思形成過程の情報を含むため、非公開とするもの。 ※資料・審議内容については、非公開事由がなくなった時点以降に公表します。
傍聴者数	なし

1 会議次第

- (1) 開会
- (2) 市立幼稚園について
- (3) その他

2 提出資料

- (1) 芦屋市立幼稚園の園児数等の推移

- (2) 市立幼稚園について
- (3) 市立幼稚園 園児数等推計表
- (4) 学校教育審議会 答申書
- (5) 学校教育審議会 答申書(資料編)

3 審議経過

(柏原企画部長)

ただいまから令和8年度第1回総合教育会議を開会いたします。本日の議題は、市立幼稚園についてです。当該内容は、市の方針案について幅広く意見を聴取し、最終的に意思形成を行う過程でありますので、公開すると率直な意見交換が損なわれるおそれがあります。そのため、本会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第6項の規定に基づきまして、公益上必要があると認められるときは会議を非公開とすることができるとされており、そちらに該当すると考えております。

ただ、本市といたしましては、これまでも芦屋市情報公開条例の規定に基づきまして、会議の公開・非公開については、市の判断だけではなく教育委員の皆様のご意見もお伺いした上で決定するプロセスを取ってまいりましたので、本日も会議の公開・非公開の取扱いにつきまして、お諮りをさせていただければと思います。

それでは、芦屋市情報公開条例第19条第1号の規定に基づきまして、会議を非公開としてよろしいでしょうか。

(異議なしの声)

(柏原企画部長)

ありがとうございます。ご異議なしと認め、そのように決定をいたします。

なお、会議録につきましては、非公開事由がなくなった時点以後、公開とさせていただきます。後ほどスケジュールをお示しする予定ですが、市議会の所管事務調査にてご報告する案件となりますので、その時点で公開する事項と考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速ですが、市長より開会のご挨拶をお願いします。

(高島市長)

こんにちは。今年度第1回の総合教育会議ということでお集まりいただきありがとうございます。前回の総合教育会議開催後、芦屋市の姉妹都市であるアメリカ・カリフォルニア州のモンテベロ市に行ってきました。今年は姉妹都市提携65周年の節目の年に当たります。学生親善使節としては、毎年7月に2人ずつ派遣をしています。4月には芦屋市がモンテベロ市を訪れ、11月にはモンテベロ市が芦屋市に来られて交流をします。前回新型コロナウイルスの影響で実施できなかったため、10年ぶりの交流でした。現地では学校訪問など様々な交流の機会があり、とても歓迎をいただきました。

学校訪問で、私立の小学校に伺い、3年生の子の前で10分ほど話す機会をいただきました。こどもたちは、事前に芦屋について勉強をしてきていました。教室の真ん中に吊ってある地球儀を使いながら、日本の位置や、芦屋のことなど、様々なやりとりをしました。その中で「日本にコンビニはあるか」という話から、ホットドックの値段などを聞かれ、値段の差にこどもたちは驚いていました。教科書に載っていることを授業として学ぶことももちろんとても大事ですが、一方で、こういった日常の中での異文化との出会いや、学びはとても大事であると感じる印象的なやりとりでした。昨年度1回目の総合教育会議では、万博での学びの話から、非日常の学びと日常の学びのお話をしました。今後、学校生活の中にこのようなちょっとした出会いからの学びみたいなものを混ぜていくことを考えられるとすごく面白いなと思いますし、学校には視察も多く来ているということなのでそこから学びにつながるような仕組みづくりもうまくできればいいなと思います。

11月にはモンテベロ市から40人ぐらいの方が来られるそうですので、市民みなでお出迎えできればと思います。よろしくお願いします。

さて、本日の議題は、大変重要な案件です。市立幼稚園に関する内容であり、教育

委員会に関わるものですが、幼児教育に関しては、保育所・こども園を所管している市長部局も教育委員会と一緒に進めていくものでもあることから、学校教育審議会の事務局にもこども家庭担当部長をはじめ、担当課が入っています。この総合教育会議の中で協議・調整を行い、市としての方向性を固められればと思いますので、よろしくお願いします。

（柏原企画部長）

ありがとうございました。それでは、これより議題に入ります。本日の議題「市立幼稚園について」に移ります。担当より説明します。

（萩原教育部長）

本年３月に学校教育審議会からいただいた答申の内容については、前回の総合教育会議でも皆様に報告したとおり、市立幼稚園が現在置かれている状況のみを捉えたものではなく、今のこどもたちを取り巻く社会的な課題や、それに対応していくために、幼児期と児童期を円滑につないで社会性の基礎を育むいわゆる「接続期」の教育の重要性がますます高まっているという観点から、本市のすべてのこどもたちのために、今後、市立幼稚園がこういった機能、役割を果たすべきかという視点で答申をまとめていただいたものであると受け止めています。

そうした答申の内容を踏まえ、今後の取組をどのように進めていくかについて、市長部局とも連携しながら、「こどもの学び・育ちを中心に」協議を重ね、方向性をまとめました。詳細については担当課長より説明をいたします。

（竹内管理課長）

資料「市立幼稚園について-学校教育審議会からの答申を受けて-」をご覧ください。前回の総合教育会議でもご説明させていただきましたが、「Ⅰ 答申内容（主

文)」のところに、答申の主文を再掲しています。これに沿いまして、「2 主文を具体化する施策の方向性」を検討しました。

「(1) 市立幼稚園の施設について」及び「(2) 市立幼稚園の機能について」をご覧ください。本市の考え方としましても、答申に記載のある幼保小の連携、とりわけ幼児期から児童期への円滑な学びの接続については特に力を入れて進めたいと考えていますので、そのために小学校と隣接する宮川幼稚園、岩園幼稚園、潮見幼稚園の3園を存続させ、それぞれの中学校圏域においてすべての就学前施設のこどもたちが、小学校での学びや生活へスムーズに移行できるよう、取組の拠点としての機能を持たせたいと考えています。

また、この機能を実践するため、一定期間内にカリキュラムを作成して、幼保小を円滑につなぐには、役割として専任の架け橋期コーディネーターが必要となりますので、配置したいと考えています。

「ア 架け橋期コーディネーターの役割」をご覧ください。架け橋期コーディネーターの役割は、太い黒い括弧で囲っている次のページも含めた3点ですが、すべての就学前施設と小学校が、5歳児と小学校1年生の2年間を見通した架け橋期の【カリキュラムの作成・推進】、【幼保小の連携支援】、【研修・研究企画、進行】としています。2ページの「イ 架け橋期コーディネーター機能の実効性の確保」については、コーディネーターは、就学前教育についての十分な経験を持ち、かつ小学校教育との連携・調整を円滑に行うため、当面は市立幼稚園の教諭、管理職経験者等を充てる予定としています。また、教育委員会に学識経験者等のアドバイザーを配置し、コーディネーターの研修、支援等を行うこととしています。

コーディネーター及びアドバイザーの配置イメージにつきましては、最後のページに別紙をつけています。図にありますように、すべての小学校と、公立・私立、幼・保を問わないすべての就学前施設が、それぞれ架け橋期カリキュラムを作成し実

践していけるよう、専任のコーディネーターを配置して調整、支援を図る体制をつくり、教育委員会、こども部局が一緒になって取り組んでいくというものです。

「3 閉園までのスケジュール」をご覧ください。現在、令和8年5月ですが、本日の総合教育会議で議論いただいた後、教育委員会に諮らせていただき、6月に議会への説明、職員への説明を行っていきます。7月以降に、保護者、地域等への説明会を行った上で、幼稚園設置管理条例の改正議案を提出し、9月に令和9年度向けの募集要項を配布いたします。

現在の案では、令和9年度末で2園の閉園を予定しているため、募集要項配布の際には、小槌幼稚園、西山幼稚園については、4歳児は5歳になったときに他園へ転園していただく可能性がある旨をお示ししての募集になると考えています。令和8年8月から9月に、議会に提出予定の幼稚園設置管理条例の改正議案について、議決をいただければ、令和9年度は年度末まで全園通常どおり保育を行い、3月末で小槌幼稚園、西山幼稚園が閉園となり、令和10年4月からは、小槌幼稚園、西山幼稚園の5歳児は他園へ転園となります。

閉園時期については、もう1年遅らせることで5歳児のお子さんに単学年にはなるものの卒園まで在園していただくという方法も検討しましたが、これまでの閉園のときと比較しても今回は大きく園児数が減少しており、単年児だけで幼稚園生活を送るにはあまりに少数となってしまうこと、また、市立幼稚園としては、異学年での学びを大切にしており、5歳児だけよりも4歳児も一緒に過ごすほうが望ましいという観点から、今回はこどもたちにとってこのような形が適切であると判断したところで

す。

3ページの「4 架け橋期カリキュラム作成、実践のロードマップ」をご覧ください。緑色の架け橋期カリキュラムについては、令和10年度にかけて作成し、令和11年度からそれに基づいた実践をスタートさせる予定です。

ピンク色のアドバイザーにつきましては、令和9年度から設置していきたいと考

えており、コーディネーターは、幼稚園教諭等の人材を活用して令和１０年度からの設置としています。

次に、「５ 市立幼稚園としての役割の推進」をご覧ください。答申の中で言及されています「今後の市立幼稚園の４つの役割（視点）」に基づき、さらに推進する点について記載をしております。

「（１）教育・保育の質の向上と多様性」、「（２）地域コミュニティの拠点」、「（３）保護者支援と家庭との連携強化」、「（４）教職員・保育者の専門性向上」、これら４つの柱は、平成２８年度の学教審の答申でも触れられており、これまでからも各園において取組を進めているところですが、今回の答申でも改めてこれらの役割が重要であると示されたことを受け、今後進める架け橋期カリキュラムの作成の取組と併せて、拠点となる３園でさらにこれらの取組の充実を図りたいと考えています。

「６ 今後の職員体制について」は、記載のとおりと考えています。説明は以上となります。

（柏原企画部長）

ありがとうございました。それでは、議事に入ります。ご意見やご質問等ございましたら事務局にいただいても結構ですし、委員の皆さまの中で活発なご議論をいただければと思います。

（高島市長）

では、教育委員の皆さん、いかがでしょうか。

（森川委員）

まず質問です。資料「市立幼稚園について」の１ページ目、「２（１）市立幼稚園の施設について」において、小槌幼稚園と西山幼稚園を閉園する方向性が示されて

いますが、その理由について記載がないので、ご説明いただければと思います。

（竹内管理課長）

答申にも示されているとおり、まずはコーディネーターを設置した上で「架け橋期カリキュラム」を作成し、幼保小の連携を進めていきたいと考えています。そのためには、小学校に隣接する幼稚園が活発に小学校と行き来しながら取り組むことが望ましいと考えているため、小学校に隣接している園を存続させるという考え方に基づき、小槌幼稚園と西山幼稚園については閉園する方向で考えています。

（高島市長）

今の説明では、閉園する園を選定した理由は分かりましたが、そもそもなぜ2園を減らす必要があるのかという点が分かりづらいと思います。5園を残せない理由を改めてご説明いただければと思います。

（竹内管理課長）

幼稚園の園児数が減少してきている状況も踏まえ、2園を閉園することとし、その人員を活用して、残る3園において、現在大きな課題となっている就学前施設と小学校をつなぐ、架け橋期カリキュラムの作成に取り組むため、コーディネーターを配置するものです。

（高島市長）

幼稚園児数が減少しているということと、幼稚園教育の質を大切にしたいという理由から架け橋期コーディネーターを配置したい、ということの2点が理由であるという理解でよいでしょうか。

（竹内管理課長）

そのとおりです。

（萩原教育部長）

園児数の推移に関する資料をご覧いただいたとおり、市立幼稚園の園児数は年々減少しています。特に令和８年５月１日時点では、小槌幼稚園と西山幼稚園において、４歳児、５歳児の在園者が小槌幼稚園で各４人、西山幼稚園で４人、６人となっており、今後も園児数の回復は見込みにくい状況です。現状や今後の人口動態等も考慮し、答申においては、市立幼稚園を一旦再編すべきであるとの考えが示されています。答申の内容も踏まえ、５園をそのまま存続させるのではなく、どの園を残し、どのような形で再編することが適当か検討し、今ご説明させていただいたような判断に至りました。

（森川委員）

分かりました。

（河盛委員）

中学校区に１園ずつという形になると、通園区域がかなり広がります。幼稚園児の場合、学校とは異なり、遠方への通園は難しいと思います。前回の説明では、車での通園も想定されていないとのことでしたので、実際には近隣に住んでいる方が通園することになるのではないかと思います。その場合、たまたま近くに住んでいて幼稚園に通うことになった子どもだけが、こども園や保育所と比べて特別な扱いを受けることになるのは適切ではないのではないかと、という点が気になります。もちろん、幼稚園がコーディネーター的な役割を担うこと自体は理解できますが、幼児教育全体としては、幼稚園、こども園、保育所のいずれにおいても、平等に同じように提供さ

れるべきだという考えが根底にあります。

また、今回の改定では、予定どおりであれば令和9年度末に閉園となります。その場合、来年度の4歳児募集において、在園途中で園が変わることをあらかじめ伝えることになれば、応募者がゼロになる可能性も高いのではないかと思います。途中で園が変わることが最初から分かっていたら、応募を控える方が出ることは十分想定されますが、いかがでしょうか。

（高島市長）

1点目のコーディネーターの配置について説明はありますか。

（内藤幼稚園教育担当課長）

コーディネーターの件と架け橋期カリキュラム、プログラムのことについて、説明いたします。架け橋期カリキュラム、プログラムについては、令和4年に文部科学省から、幼児教育と小学校教育の接続を考えるよう示されました。架け橋期とは、5歳児の1年間と小学校1年生の1年間の計2年間を指し、遊びを通した学びから教科の学びへ、なだらかにつなげていくことを目指すものです。

就学前施設では遊びを通して学びますが、小学校に入ると、座って学習するなど環境が大きく変わるため、戸惑いやつまずきを感じるこどももいます。こうした接続を円滑にすることで、小学校生活への不安やつらい思いが軽減するように、また不登校の対策になるように、と芦屋市でも少しずつ取組を進めています。

今回配置を想定しているコーディネーターは、この接続をどのように進めていくかを考え、実際に取り組む役割を担うものです。小学校に出向いて学校の状況を学んだり、就学前の学びを小学校につなげるために必要なことを検討したりしながら、連携を進めていく業務になっています。また、このコーディネーターは、特定の幼稚園だけで活動するものではなく、周辺の就学前施設全体を小学校につなげる役割を担う

と考えています。存続する各園の近くに小学校があるため、校区ごとにグループをつくり、その校区全体が小学校へ円滑につながるように支援します。特定の1園や特定の小学校だけを対象にするのではなく、すべての就学前施設から進学することもたちが戸惑わないよう、接続をコーディネートする役割です。

さらに、小学校ごとの接続に加え、将来的には中学校までを見据え、教育をつなげていく取組についても、コーディネーターや地域の学校園とともに進めていけたらいいと考えています。

（河盛委員）

私たちは主に幼稚園について議論していますが、こども園や保育所については、正直なところ十分に議論できていません。

幼稚園に通っている方は、たまたま近くに幼稚園があったから通っているという場合が多いのではないかと思います。特に山手中学校区では距離の問題があり、岩園幼稚園の近所でなければ通園が難しいというケースも考えられます。たまたま幼稚園に通っているこどもたちの教育だけを対象に議論していてよいのか、という疑問は以前からあります。芦屋市の就学前のこどもたちは、幼稚園、こども園、保育所など、それぞれの施設で教育・保育を受けているので、一部の幼稚園通園者だけではなく、就学前のこども全体について議論すべきではないかと考えています。数人規模の幼稚園利用者のためだけの議論になってしまうのであれば、議論の在り方として少し違和感があると感じているところです。

（高島市長）

ありがとうございます。答申で示されていた、今後は保育所やこども園を所管している市長部局とも連携し、議論していくべきだという点にも通じるご意見だと思います。2点目にあった令和9年度に4歳児の入園希望がないのではないかとというご指

摘について何か検討されていることはありますか。

（萩原教育部長）

河盛委員がおっしゃるように、その点については私たちも危惧しているところではあります。4歳児のお子さんが途中で転園となる可能性があることで、今回の申込みを控えられる方もいらっしゃるかもしれません。一方で、その方たちに5歳児の卒園まで在園していただくこととした場合、次年度のお子さんと同じようになってしまいますので、どこの時点で単学年の状態になるかという話であるかと考えています。

最後の1年間については、在園児の人数が少ない中でも、こども同士が関わる機会を増やしたり、周辺の就学前施設のこどもたちとつないだりすることで、教育の質を維持できるよう工夫する必要があると考えています。

（森川委員）

今の点についてですが、保護者の方が納得されて、転園を前提に入園されたとしても、幼児が途中で転園して、そこで新たに人間関係をつくることになります。さらに、小学校へ進学する場合には、最終的には元の学区に戻ることも考えられます。そうになると、幼小の接続を重視しているにもかかわらず、途中で関係性を切断するような形になってしまうのではないかという点が気になります。

そのため、最後の年に入園することについても、希望があれば、転園ではなく最後までその園に通えるような体制をつくっていただいてもよいのではないかと思います。新たな園児が入ってこないのも、異年齢交流の面では難しさがあると思いますし、難しい課題だとは思いますが、何かそこを手当てするような方法を考えることはできないのかと思っています。

（萩原教育部長）

再編の方針が決まった後の期間をどうするかは、非常に難しい課題だと思っています。ご指摘のとおり、こどもたちにとって人間関係の分断になったり幼小接続が途切れたりすることがないように形で周辺の就学前施設も巻き込んだ取組や工夫をしていく必要があると思います。一方で、この時期を１年遅らせることになれば、現在進めようとしている様々な取組も、すべて１年遅れることになりますので私どもとしては令和９年度末で進める方向で考えているところです。

（森川委員）

１年遅れることになるのでしょうか。遅れない形で進めることはできないのかなと。予算や費用面で課題があるのかもしれませんが、重要な時期であると思いますので、何とか対応できないのかというのが率直な思いです。

（高島市長）

例えば、小槌幼稚園に４歳児が４人在園している場合、そのこどもたちは、残る３園のどこでも選択できるという形になるのでしょうか。

（萩原教育部長）

そうですね。どこでも選んでいただけます。

（高島市長）

小槌幼稚園の場合はおそらく近くの宮川幼稚園に行く方が多いでしょうか。その２園は意外と近いので、そういう意味では小学校区はあまり変わらなそうですね。西山のほうが今いただいたお話のようなことはあり得るかもしれませんね。幼稚園に行かれる場合は、おそらく岩園幼稚園か少し遠いですが宮川幼稚園になる可能性が高いで

しょうか。例えば、西山幼稚園のこどもたちが転園して岩園幼稚園に行った場合、岩園幼稚園から岩園小学校に進学する子もいれば、山手小学校・朝日ヶ丘小学校に進学する子もいるかもしれませんよね。現状であっても一つの幼稚園から各々の小学校に進学していくと思いますが、現在の状況とどの程度違いがあるのか、もし分かるのであればイメージを説明していただけますか。突然「別の幼稚園に行ってください」と言われ、全く違う環境に移り、さらに小学校進学時にも別の環境に移る、というイメージなので、人間関係の分断につながるのではないかという懸念が出ているのかと思います。

（内藤幼稚園教育担当課長）

西山幼稚園のこどもが岩園幼稚園へ転園する場合でも、公立幼稚園であれば、教育内容や生活の仕方に大きな差はなく、その点で戸惑うことは比較的少ないと考えています。ただし、場所が変わることによる戸惑いはあると思われるので、その点は保育の中で補っていく必要があると思います。

また、小学校への接続については、幼稚園には園区がなく、現在も様々な地域からこどもが通っているため、幼稚園では、一番近いところだけではなくて、在園しているこどもたちが進学する予定の小学校をできるだけ訪問するようにしています。

例えば岩園幼稚園は、岩園小学校、朝日ヶ丘小学校に進学する予定の子がいるので、両方の小学校に伺うなどと、どの幼稚園でも、複数の小学校を訪問しています。

また、例えば山手小学校に進学するこどもが少なく、より不安を感じやすい状況であれば、遠足を兼ねて山手小学校を訪問したり、校庭や図書館を貸してもらったりすることも可能です。こうした取組はカリキュラムの中に組み込むことができますので、こどもたちの不安を軽減するための対応は可能であると考えています。

(森川委員)

少しイメージが沸きました。ありがとうございます。

(塩山学校教育担当部長)

先ほど例に出していただいた小槌幼稚園は、現在でも宮川小学校にも打出浜小学校にも行っています。周辺のこども園などとも関わりながら、小学校への接続を進めている状況です。今後は、よりきちんとしたプログラムとして位置付けていきたいと考えています。

(森川委員)

分かりました。

(芳村委員)

資料にあるイメージ図によって考えが整理され、理解しやすくなりました。ありがとうございます。図だけを見ると、各地域にコーディネーターがどの程度配置されるのかが分からないですが、精道中学校区については、図上では幼稚園、保育所、こども園の数が多く見えるので、他の地域と同じ人数のコーディネーター配置であれば、かなり負担が大きいのではないかと感じました。

また、幼稚園や就学前施設と小学校をつなぐコーディネーターが配置されることで、小学校入学に対する不安が軽減されることはよいことだと思いますが、具体的にどのような取組を行うのかがもう少し示されると、保護者もより安心できるのではないかと感じます。今の説明では、芦屋市が目指している「架け橋期」の取組と、保護者が期待する内容とのイメージが一致しない可能性があるのではないかと思います。例えば、「小学校での学習への不安をなくす」と聞くと、保護者によっては、幼稚園や保育所の段階で計算や平仮名の読み書きまで教えてもらえるのかなと受け止めるか

もしれません。私が保護者であれば、そのように感じてしまうところもあるので、今後さらに明確にしていくことで、保護者の方にも内容が浸透していくのかではないかと感じました。

（高島市長）

ありがとうございます。それは大事ですね。

（内藤幼稚園教育担当課長）

就学前施設の先生方も、小学校でどのような教育が行われているのかを十分に把握できていない部分があり、小学校の先生方も、就学前施設でどのような保育・教育が行われているのかを十分に理解できていない面がありますので、現在は、互いに一緒に学び始めている段階です。

今はまだ考えている段階での説明になりますが、コーディネーターに特に担ってほしい役割としては、小学校１年生の教室に入ってもらいたいと考えています。１年生の４月、５月のこどもたちの様子を実際に見て、勉強に対する姿勢や、どのような点がネックとなっているのかをまず知ることが重要だと考えています。

それらを把握した上で、こどもたちと実際に関わり、就学前の教育・保育にどのように返していけば、なだらかな接続につながるのかということを就学前施設と小学校がお互いに学び合うところから始めることが、大きな課題であり、今後大切にしていけるべき点だと考えています。そして、コーディネーターがそこで把握した内容を、小学校側にも、就学前施設側にもつないでいく役割を担うことを想定しています。まだ漠然としている部分もありますが、現時点ではそのように考えています。

（高島市長）

平仮名や計算の勉強を幼稚園でやるという話じゃないということですね。

（内藤幼稚園教育担当課長）

そうです。意欲などを育てていきたいというところです。

（高島市長）

非認知能力とか、「遊びながら学んでいる」というところを小学校側にも分かってほしいということですね。その辺り小学校側はどうでしょうか。

（塩山学校教育担当部長）

先ほども少し申し上げましたが、小学校に入ると、突然、机と椅子で過ごす環境になります。中には、自分の場所ができたことで落ち着くこどももいますが、一方で、慣れない子たちも多くいますので、小学校のカリキュラムの中に、幼稚園で学んできたことや体験してきたことをうまく取り入れ、遊びの中での学びがさらに広がったり、深まったりするような工夫が必要だと考えています。こどもたちが、なだらかに小学校での学びへ移行し、いつの間にか「これは勉強になっていたんだ」「こんなことが分かるようになった」「もっと知りたい、学びたい」と感じられるような、いわゆる現在重視されている探究的な学びにもつながっていく、そういったカリキュラムになればよいと考えています。

これまでも何もしてこなかったわけではなく、例えば、小学校で「秋見つけ」のような活動を行う際に、小学校の担任の先生から「幼稚園のこどもたちも一緒にできるのではないか」と提案があり、幼稚園のこどもたちに来てもらったこともあります。その時には、１年生が誇らしげに幼稚園のこどもたちを連れて、「あそこにこういうものがあるよ」と教えてくれていました。幼稚園のこどもたちも「こんなものを見つけた」と大切に持ち帰り、その後、幼稚園でもさらにいろいろなものを探すといったこともありました。こうした活動、体験が、きちんと積み重なっていけば、どの幼稚園、保育所、こども園に在籍していても、小学校での学びにつながっていくというこ

とを共有できるようになるのではないかと考えていますので、こうした取組をしっかりと進めていきたいと考えています。

小学校が、こどもたちにとって楽しい場所であり、しっかり学べる場所であり、時には友達とけんかをしながらも、みんなで楽しく学べる場所であると実感できるようにしていきたいと思っています。

（三宅委員）

先日、幼稚園の園長先生から説明をいただいた中で、特に印象的だったのは、各幼稚園での取組です。例えば、小槌幼稚園で絵本を作るという取組がありました。その取組では、SDGsを前提としてこどもたちに学ばせるのではなく、こどもたち自身の疑問や関心が、結果としてSDGsにつながっていったという視点が示されていました。こうした視点こそが、小学校の先生方にも求められるものではないかと思いました。

また、宮川幼稚園では「科学する心を育てる」という取組をシリーズで行われています。2025年の資料を読むと、「豊かな感性と創造性の芽生えを育む」と題して、「好きを伸ばして得意を育む」という視点も示されており、その中で印象的だったのは、先生方のこどもの見取り方が「～と思っている」から「こんな力が芽生えている」という見取りに変わったということでした。このような、先生方がこどもたちを見る視点こそが、これからの教育に求められているものではないかと感じました。

小学校に入学した後にも、そうした視点が小学校の先生方に求められていると思います。現在、小学校の先生方がどの程度そのような視点を持っておられるのかなということが気になりました。先ほど、幼稚園と小学校の先生方が互いに研修を積み重ねていくというお話もありましたので、今後、こうした視点を共有しながらこどもたちを見ていけるようになるとういと感じました。

（大林学校教育課長）

三宅委員がおっしゃったとおり、小学校にどれだけそういった視点があるのかという点については、恥ずかしながら、私たちとしてもまだまだ十分ではないところだと思っています。

学校に入ると、どうしても評価という点が先立ってしまうところがあります。評価を行うためには、何らかの客観的な数値などが拠りどころになりやすい一方で、こどもたちの「好き」という気持ちも大切にしながら見ていく必要があり、学校の先生もその間で板挟みになっているようなところもあります。

ただ、今お話にあった「見取り」は非常に大切だと考えています。学校では評価が求められますが、見取りが評価を補完する形がきっとあると思います。幼稚園の先生方の見取りを小学校の評価にどう組み込んでいくのか、ぜひコーディネーターの先生にも入っていただき、幼稚園の視点から小学校を見ていただきながら、一緒に考えていければと思います。それらが位置付けられれば、幼稚園から小学校への接続がより滑らかになるのではないかと考えています。

（河盛委員）

今さら申し上げても仕方がない面はあるのですが、幼児教育施設配置のバランスという点では、少し気になるところがあります。例えば、精道中学校区については、小槌幼稚園がなくなったとしても、宮川幼稚園、精道こども園、西蔵こども園があり、結果的に、公立の就学前施設が比較的バランスよく配置されているように見えます。

一方で、山手中学校区は非常に広い区域であるにもかかわらず、公立の幼児教育・保育施設は、岩園幼稚園と岩園保育所の2施設で、いずれも岩園町にあります。そう考えると、山手中学校区内では公立施設の配置がかなり偏っているのではないかと印象があります。公立の幼児教育・保育施設を希望される保護者の方にとっては、地域的な偏りを感じられると思います。今さらどうこうできる話ではないですが、

過去に保育所の民営化などを進める際に、将来的な施設配置や地域バランスをもう少し見通した上で検討された方がよかったのではないかと感じます。

（高島市長）

この点について、ニーズ量という観点で見ると、精道区域には幼児教育施設や就学前教育施設が比較的多く、逆に潮見区域はかなり少ないように見えます。公立・私立の別までは、おそらく把握していないのではないかと思います。ニーズ量として見た場合に校区ごとのバランスは取れているという認識でよかったでしょうか。

（鳥越こども家庭担当部長）

人数面で見ると、比較的バランスは取れていると思います。校区ごとの人数についても大きなばらつきはなく、定員面でも、特定の校区だけ園数が大きく不足しているという状況ではないのではないかと認識しています。

（萩原教育部長）

前回の在り方の検討時には、待機児童対策が大きな課題としてありました。そのため、ニーズ量を踏まえながら、どの幼稚園・保育所を統合するのか、どこを民間に移行するのかといった点について、市全体でかなり協議を重ねてきたものと認識しています。その結果として、現在の施設配置につながっている状況です。現時点では、ニーズ量と供給量に大きな乖離はなく、一定程度安定した段階にこぎつけられたと考えています。一方で、今後はこどもの数自体が減少していくことが見込まれますので、圏域ごとに現在の施設数や定員規模を維持していくことが本当に適切なのかについては改めて市全体で検討していかないといけない時がくると考えています。

（鳥越こども家庭担当部長）

公立と私立で見ると、やはり公立の保育所やこども園の人気の高い状況があります。以前は待機児童が大きな課題となっていたため、市としても私立保育所の誘致を進めてきました。一方で、こどもの数が減少している中で、保育所やこども園の利用人数も徐々に減ってきています。既に私立の保育所やこども園では、毎年、定員に対する在籍人数が減ってきているという状況もありますので、今のうちから考えておかねば、今後、保育所やこども園をどうしていくのかという課題が出てくることになります。ここ数年は、定員数的には満たされていると思いますが、その先を見据えると、先ほど萩原部長からあったように、市としてどのように施設を残していくのかをしっかりと考えていかなければならないです。

（森川委員）

答申の主文には、中央に記載されている2つの内容の前に、前文があります。その前文には、委員の皆様の悩みや想いも表れているのではないかと思います。その中に、「すべてのこどもたちの健やかな育ちを地域全体で支えていくという意志に基づき、『こどもを中心』に慎重に審議を行った。」という一文があります。この文章を今回の資料にそのまま引用することは難しいのかもしれませんが、こうした趣旨を記載していただくことで、主文の理解がより進むのではないかと感じました。

その点にも関係しますが、今回の資料では、閉園に関することや、架け橋期のカリキュラム、コーディネーターの配置については非常に詳しく記載されています。一方で、答申の9ページでは、接続期教育を推進する機能を持たせることに加えて、地域コミュニティの交流の拠点や身近な相談の場としての充実、人材の専門性の向上についても、セットで示されていますので、主文は2つですが、それを支える取組として、ほかの3つの項目も重要だと思います。今回の資料では、閉園や架け橋期カリキュラムが中心に見えますが、地域交流や相談機能、人材育成も同時に進める必要があるの

ではないかと思います。その点が少し後回しに見えてこれでよいのだろうか、という印象があるのですが、いかがでしょうか。

（竹内管理課長）

おっしゃっていただいたとおり、項番5市立幼稚園としての役割の推進に記載している4つの役割については、教育委員会としても非常に重要なものと考えており、これまでも各園で取り組んできたところですが、今後も引き続き、さらに高めていく必要があると考えていますので、前段に記載している「架け橋期カリキュラム」のコーディネーターに関する取組だけでなく、こうした役割の重要性についても、もう少し記載内容を検討したいと思います。

（高島市長）

答申の主文については、結論部分だけを抜き出すのではなく、前文の部分も含めて示したほうがよいのではないかというご指摘について、私もそのとおりだと思います。

（竹内管理課長）

今回は、分かりやすくお示しするために、このような形で提示させていただきました。ただ、ご意見をいただいたとおり、前文についても重要な部分であると認識していますので、その趣旨がうまく伝わるような形で整理したいと思います。

（高島市長）

よろしくお願いします。教育長、何かありますか。

(野村教育長)

評価のところだけ少しお話させてもらいます。就学前教育と小学校教育の接続において、これから評価の在り方はかなり変わっていくと思います。もともと評価の中には、「評定」といういわゆる点数で表す評価の考え方があります。小・中学校でいう「学びに向かう力」は、以前は「関心・意欲・態度」と言われていました。教師によっては、手を挙げた回数やノートを提出した回数なども含めて、「関心・意欲・態度」として評価していた面がありましたが、今後はそうしたものを点数化しない方向性になってくるようです。「学びに向かう力」は、小学校・中学校を問わず「この子はどのように問いを立てている」「このような工夫をしている」といったこどもの姿を見取る視点こそが、評価の視点になるのだと思います。そういう意味では、小学校や中学校の先生方が、幼稚園、こども園、保育所の先生方のこどもを見るまなざしを学びに行く必要があると考えています。

今後は、おそらく文章による記述評価になっていき、それぞれの教科の中で、こどもの姿をかなり細かく見取り、「学びに向かう力」として記述していくことが求められる方向になっていくと思います。その意味でも、就学前のこどもが純粋に様々なことを不思議に思ったり、問いを立てる姿を見取ること、何につながっているのか考えることは非常に重要です。カリキュラムの在り方ともつながるものだと思いますが、その評価の視点が大切だと感じながら聞かせていただきました。

(高島市長)

ありがとうございます。先ほどの大林学校教育課長の話の裏付けですね。

(鳥越こども家庭担当部長)

4月から保育所や認定こども園などを所管することになり、現場の様子を見る中で、先生方が一人一人のこどもたちを本当によく見て、丁寧に観察されていると感じ

ています。「評価」という言い方は適切ではないですが、こどもがどれだけ成長しているかを、非常に細かく記録されています。それを、非常に忙しい状況の小学校の先生方が、教育長がおっしゃったような、こどもの成長する姿を見取るための時間をどのようにつくり、確保されていくのか、気になりました。

（野村教育長）

毎日すべてを細かく見ていくというのは難しいと思います。ただ、小・中学校の先生の時間割は、すべての時間が詰まっているわけではありません。1週間でおおむね27コマから29コマ程度あるなかで、低学年の担任は少し多くなる傾向がありますが、授業が20コマ程度埋まっているような状況です。空きコマを活用して、隣接する園や引き継いでいる園のこどもの様子を見に行くことは、十分あり得ると思います。まずは、こどもの姿を見て帰ってくることが大事かと思います。おそらく最初は、「泥団子を作っていた」「はだして走り回っていた」といった受け止めから始まると思いますが、回数を重ねる中で、だんだんと「なぜこの子はダンゴムシに強い関心を持っているのか」「あの子はザリガニの釣り方を工夫し始めたな」といったように、こどもの姿をより深く見取れるようになっていくのではないかと思います。幼稚園に招かれたお客さんとして見に行くのではなく、自分の学校に入学してくるこどもたちであるという意識を持って見に行くと、こどもを見る目が少しずつ肥やされていくのではないかと感じています。こういった空きコマの活用に加え、今後は学習指導要領でも、余白の創出といって実現可能性の確保という柱が立っています。現在、岩園小学校では、次期学習指導要領を先取りする形の教育課程として、木曜日の午後に低学年が早めに下校しています。例えば、そういった下校後に評価の研修を組むことも考えられますし、隣接する岩園幼稚園と時間を合わせ、幼稚園のこどもの降園時間を調整いただき、小学校の先生が幼稚園のこどもの様子を見に行くような取組も考えられるのではないかと思います。そういった形で緩やかに進めていけるのではないかと考

えています。

（高島市長）

ほか、いかがでしょうか。

（三宅委員）

架け橋期コーディネーターの役割について確認させてください。カリキュラムを組んでいくということですが、イメージ図では幼稚園がセンター的な位置付けになっています。これは、周辺のこども園や保育園でも、コーディネーターが考えた同じ取組を実施していくという理解でよいのでしょうか。

（内藤幼稚園教育担当課長）

以前から、小学校区ごとに、近隣の就学前施設でグループを組んでいます。それぞれの園や施設によって保育の内容は様々ですし、学校にもそれぞれの教育がありますので、できるだけ各園・施設の独自性は生かしていきたいと考えています。ですので、コーディネーターについては、まずは隣接する園から動き始めることになりますが、カリキュラム自体は、それぞれの校区ごとに、その地域の特色を生かしてつくっていくのがよいと考えています。コーディネーターが各校区に入り、学校や就学前施設それぞれの良さを取り入れながらカリキュラムをつくっていくことが、芦屋独自の「芦屋スタイル」として望ましいのではないかと考えています。

（三宅委員）

分かりました。

（高島市長）

そういう意味では、市全体で一つの形を当てはめるということではなく、公立・私立、保育所・幼稚園・こども園や小学校など、それぞれの施設の特色を踏まえる必要があるということですね。その中でも、市として大事にしたい共通の方向性や視点については、ある程度統一しながら、実際の進め方や内容については、それぞれの園・施設や学校、校区の実情に合わせてカスタマイズしていくという理解でよいでしょうか。コーディネーターの先生にはかなり大きな役割が求められますね。

（内藤幼稚園教育担当課長）

はい。芦屋市の架け橋期カリキュラムとして、「こうしたことを大事にしてつくっていく」という大きな方針は示していきたいと考えていますが、民間・公立を問わず、それぞれの園には良さがあり、小学校にもそれぞれの特色があります。そうした各園・各校の良さはなくさずにつなげていきたいと考えています

（高島市長）

分かりました。ありがとうございます。

（芳村委員）

幼稚園には関係ないのですが、中学生になり環境が変わると、単純に「勉強が嫌だ」という理由で学校から遠のいてしまうこどももいます。幼稚園から小学校への架け橋期カリキュラムが生かされて、学校での学びは机上の勉強だけではないということがもっと前面に出れば、学校から遠のいているこどもたちも学校に戻ることもできるのではないかと感じましたので、将来的にはその辺りも考えていただけたらなと思います。

（高島市長）

大事なことです。いきなり定期考査があったり、と環境が変化しますしね。

（芳村委員）

そうなんです。中学１年生の「どうやって勉強したらいいか分からない」という声をよく耳にします。中学校に入ると、いきなり文章を書く量も増えますし、先ほど教育長がおっしゃったように、評価されるためだけに勉強しているように感じてしまう面もあるのではないかと思います。これだけ幼稚園や小学校では、探究的な学びを大切にしているにもかかわらず、中学校でその部分がなくなってしまうように見えることは、とても残念に感じます。

（野村教育長）

おっしゃるとおりです。これからは、小学校・中学校に限らず、探究的な学び、学びに向かう力がとても大事になります。先生方の評価の視点が変わらなければ、テストも変わりませんし、問いも変わってこないのではないかと思います。これからは、こども自身から出てくる問いをもとに授業をつくっていく方向になっていくのではないかと思います。そういう意味でも、幼児期からの学びは非常に大事だと考えています。

（高島市長）

ありがとうございました。今回の件については、教育委員会の中で幼児教育をどのような形で進めていくのかを考えていただくものだと思いますので、市長部局としては、教育委員会が考えている方向性を尊重したいという思いがあります。答申を改めて見る中で、やはりここはぶらさずをお願いしたいと思うのは、森川委員もおっしゃっていた「こども中心」という点です。

見え方によっては、今回の議論が「園児数が減ったから、園の数も減らせばいい」という単純な話に見えてしまうかもしれませんが、学教審でこれまで積み重ねてきた議論や、教育委員会での議論は、そういうことではないと理解しています。

園児数が減ってきているという現状があり、そこは今後に変えにくいという状況で、極めて大切な幼児期における教育として、その状況が子どもにとって本当に望ましいのか、幼児期の学びをよりよいものにするためには何が必要かを考えた結果、やはり一定の集団規模は必要ではないか、という議論を経て、園の数は少し減ってしまいが、幼児教育の質を高めていくための一つの手段として3園に再編するという方向性で進んできたと理解しています。子どもにとってより良い学びの環境を整えるために、そうしたプロセスで議論が進んできたというところをぶらさずをお願いしたいと思います。

例えば今後、この話を発信していく際には、どうしても「人数が減ったから、園の数を少なくしてもいいのではないか」という印象で受け止められてしまう可能性があると思います。しかし、そうではなく、今まさに幼稚園で学んでいる子どもたち、これから幼稚園に入ってくる子どもたち、さらにはまだ生まれていない子どもたちのことまで含めて考えたときに、園の数を減らすことになったとしても、幼稚園教育の質を高めていくことを重視しているのだ、ということを丁寧に伝えていく必要があると思います。

今回の決断は、幼稚園教育だけでなく、公立・私立を含めた就学前施設と小学校との接続をより強めることで、就学前教育全体、さらには小学校での学びの質を高めていくための大きな決断だと受け止めています。母校がなくなることに寂しさを感じる方もおられると思いますが、決して「人数が少ないから減らす」という話ではなく、これから学ぶ子どもたちのことを考えた上で、これがいい決断だということですので、そこは市長部局としても尊重したいと思います。

今後、コーディネーターをどのように配置していくのかなど、まだ詰めていくべ

き点は多くあると思いますので、そこはしっかり進めていただきたいと思います。私たち市長部局としても、幼児期の教育は非常に大切なものだと考えていますので、その質が高まっていくことを期待しています。今後もこどもの数が減っていくことは、残念ながら起こり得る未来として見えていると思います。これは教育委員会だけの話ではないと思っていますので、保育所やこども園など、市長部局が所管する就学前教育施設も含め、これからも引き続き、市長部局も一体となって議論していきたいと思っています。本件における、協議調整については、一旦この方向性で進めていただくという事で終了したものとして、お返ししたいと思います。

（柏原企画部長）

数々のご意見をいただき、ありがとうございました。資料として文字にすると、どうしても「今ある課題に行政としてどう取り組むか」という表現になりがちで、こどもの姿が見えにくいように受け止められるかもしれません。しかし、先ほどのご議論にもありましたように、こどもを中心に据え、こどもにとってどうあるべきかを第一に考えた資料ですので、しっかりと発信していく必要があると考えています。今後、取組が本格的に進む中で様々なことがあると思いますが、その点を肝に銘じて進めてまいります。ありがとうございました。

それでは、本日予定しておりました議題は以上となります。

続いて、次第3 「その他」について、事務局からの報告は特にはございません。それでは、最後に、教育長よりご挨拶をよろしくお願いします。

（野村教育長）

ありがとうございました。今日いただいたご意見を少しまとめる形で、ご挨拶に代えたいと思います。こども中心という視点は、まさにそのとおりだと思います。併せて、これからの社会の変化も見据えながら、幼児期の教育の質をどう担保していく

かを考えてきました。その中で、今回の決断においては、小学校・中学校へとつないでいく視点、つまり学びと育ちの接続・連続性を大切にすることが欠かせないと考えた上での決断になります。この接続の大切さに加え、こどもの育ちや学びをどのように見取っていくのかという評価の視点も重要です。どの施設に通っていても、同じ芦屋のこどもであるという考えのもと、しっかりとつないでいきたいと考えています。縦横のつながりという意味では、コーディネーターのようなつなぎ役が非常に大事だと思います。例えば、「この遊びが、この学びにつながっている」「この発見が、将来のこうした育ちにつながっていく」といったことを見取る視点が大事ですので、幼児教育側だけでなく、小学校や中学校からもアクセスできるような仕組みが、これから求められていくのではないかと考えています。

市長が中央教育審議会教育課程企画特別部会で議論されているように、国の大きな流れとしても、深い学び、探究、多様性の包摂といった視点が重要になっています。多様性の包摂という点は、年齢や世代、施設を超えて、様々な人と出会うことが大切です。少子化が進む中でも、こどもたちに様々な出会いの機会を大事にしてあげて、他者から学ぶ機会を保障していきたいと考えています。どの園や小学校・中学校にいる子も、自分の人生を切り開いていけるこどもを育てるという視点で、しっかり見ていきたいと思っています。

余白の創出も非常に大切だと言われています。あれもこれも詰め込むのではなく、余白をつくらなければ、こどもたちの姿をゆとりを持って見取ることが難しいという点から、今後、小・中学校では教育課程や時間割の見直しも進んでいきます。教師の研修の時間や、こどもたち一人一人に向き合う時間の確保に向かって進んでいくと思いますので、この3つの柱の方向性も加味した上での質の担保であると考えています。

最終的には、こどもにとって何が最善かということが一番にあります。国の方でもこども家庭庁と文部科学省が一緒に議論を進めているように、私たちも市長部局と教育委員会で一緒に進めていきたいと思っています。これこそがまさに「架け橋」であり、

こどもたちとともに未来社会への架け橋をつくっていく取組だと思っています。

今後も、こども中心の視点を大切にしながら議論を進めていきたいと思っていますので、引き続きよろしくお願いいたします。

本日はありがとうございました。

（高島市長）

ありがとうございました。

（柏原企画部長）

ありがとうございました。次回の開催につきましては協議事項が確定しましたら日程を調整させていただきます。以上をもちまして本日の会議を閉会といたします。

以 上